

《忌避》の諸相（下）

—分析枠組の設定のために—

薄 井 明

<目次>

1. 序 — 問題の設定 —
2. 《忌避》と<共同体の秩序>
 - 文化=社会体系の要請としての《忌避》 —
3. 《忌避》と<身体=アイデンティティ>—《忌避》の基盤—
 (以上、『一橋研究』第11巻2号1986年7月. に所収)
 (以下, 本稿)
4. <両義性>と<両価性>
 - 《忌避》の心的ダイナミズム —
5. <身体言語>としての《忌避》
6. 結びに代えて

4. <両義性>と<両価性>

— 《忌避》の心的ダイナミズム —

ところで、現代の日常生活に視線を向け直してみる時、《忌避》⁽¹⁾といわれるものが問題として対象化される状況とはいかなる場合だろうか。先述した人類学者 M. Douglas は<穢れ>の問題に取り組むきっかけとなったエピソードについて次のように述べているが、そうしたことはわれわれもしばしば経験すると言ってよいだろう。

「清潔の問題に関する夫の許容度は私のそれよりもはるかに厳しいものであって、私はなによりもこのことから、不浄とは相対的なものであるとする立場をとらざるを得ないようになった。」(1966, p. VIII. 邦訳, p. 14)

そうした直観から出発して人類学者 Douglas は、様々の部族社会の比較とい

う方法を通して、《忌避》を文化の〈象徴的分類体系〉の中で解明するという研究方向をとったわけである。だが、本来このようなエピソードには、Douglasとは異なる問題の展開可能性が含まれている。前稿の「1. 序 — 問題の設定 —」のラフな定式を引けばこうである。

「Ⅱ. 現代社会でその成員全体にほぼ共通して《忌避》されるものがある一方で、強迫神経症や恐怖症にその極端な例を見ることができるよう、《忌避》の程度に違いがあることも事実である。これをどう理解すべきか。」

この問題設定を推し進めていけば、一つの方向として、《忌避》を主体の〈人格構造〉内での力動現象という視点から捉えていくことが可能となってくるだろう。

《忌避》は一方で〈生理的嫌悪感〉というようにカテゴライズされ、固定的なものというイメージで表象されやすい。しかし、《忌避》現象を注意深く観察してみると、それは決してスタティックなものではなく、むしろダイナミズムに富むものであることに気付かざるをえない。そして、この《忌避》のダイナミズムを一番明瞭に示し、しかも《忌避》という一種独得の現象を他のものから鋭く区別する特徴はその〈両価性〉（Ambivalenz）である。

周知のように、宗教における〈聖なるもの〉の多くが〈清浄なもの〉であると同時に〈不浄なもの〉でもあると見做されていることは、Robertson Smith⁽²⁾以来、多数の論者によって繰り返し指摘されてきた。そうした〈両価性〉は現代社会では衰退してきているように見えるが、《忌避》現象にもそれに類似した〈両価性〉が潜在していることは指摘可能である。例えば、〈醜いもの〉〈無気味なもの〉に対して通常われわれは《忌避》の態度を取るが、それと同じ範疇に属するものが同時に強い関心を惹くことも事実である（好奇心）。あるいはまた、「鳥肌が立つ」という感情表現は極めてネガティブな価値を帯びた《忌避》感情の表現としてのみに口にされているように見えるが、それは同時に極度の快の感情表現でもあることは、頻繁ではないにせよ、経験することである。⁽⁵⁾⁽⁶⁾ 等々。

つまり《忌避》のダイナミズムとは、《忌避》という非常にネガティブな価値付けの極がそれと正反対の極と隣接しながら、同時にその両極化の度合すなわち〈両価性〉の度合に応じて《忌避》の程度も変動するところにある、とひとまずは言えるだろう。

こうしたことを踏まえた地点から翻って見る時、先述（「2. 《忌避》と〈共同体の秩序〉」）の〈穢れ〉をめぐる人類学の所説（特に E. Leach のそれ）は、そのまま鵜呑みにしてしまうわけにはいなくなる。例えば、Leach の所説は、人間に普遍的なく二元的コード化〉に対して、その〈境界〉に位置するものはその〈両義性〉（ambiguity）ゆえに《忌避》されるべきものという属性を帯びる、という点に集約されると言ってもよいだろう。そしてさらに Leach は、「何故に〈両義的なもの〉が《忌避》されるのか」という問いに対して、「自然は真空を嫌うと言われる。人間は複雑さを嫌うのである。」（1985, p. 137）という人間観を以って答えている。そうしたことは一面では妥当すると言えるが、もしそれを制限なしに主張するとすれば、俄かに承認しがたいものとなる。厳密に言えば、〈両義性〉はいたるところに存在するといえよう。だが、先述したように〈両義的なもの〉あるいは〈曖昧なもの〉が必ず《忌避》を帰結させるわけではないし、それに対する〈許容度〉にもバリエーションがある。それゆえ問題は、Merleau-Ponty が E. Frenkel-Brunswik の研究成果に基いて述べているように、「彼が両義性をもっているかどうかではなく、彼がおのれの両義性を処理するやり方」（1966, p. 116）にあるといえるのではないだろうか。

そこで問題を整理するために、概念整理を行っておこう。〈両義性〉（ambiguity, ambiguité, Zweideutigkeit）と〈両価性〉（ambivalence, Ambivalenz）。この二つの概念は通常十分に注意して区別されてはいないが、《忌避》の問題を主題としているここにおいては、両概念の峻別を怠るわけにはいかない。この点を明確にするために、Merleau-Ponty の所説を手掛かりにしてみることしよう。

Merleau-Ponty によれば、〈両義性〉と〈両価性〉は同じ現象ではない。「つまり同一対象・同一存在に対して二つの二者択一的な心像^{イメージ}を抱きながら、それらを結びつけようと努力することもしないし、またそれらが実は同一対象や同一存在に関わっていることを認めようと努力もしないところに両価性⁽⁷⁾（ambivalence）が成り立つわけです。」（同書, p. 110）

「両義性は、両価性とは違って、大人の現象、成熟性の現象であって、それには何ら病的なところはありません。……つまり両義性とは、われわれがそれに真正面から立ち向うばあいの両価性であり……、心理的に硬い人に欠け

ているのは、まさにこの能力……なのです。」(同書, p.110-111)

もちろん, Merleau-Ponty の〈両義性〉という概念の用法は, Leach とは必ずしも一致しない。Leach が言う〈両義性〉が認知される対象のカテゴリー上の位置・属性に関して使われているのに対して, Merleau-Ponty の場合はそうした〈両義的なもの〉に対峙した時の主体の〈構え〉の一形態に〈両義性〉という概念が使われている。ただ, そうした用法の違いはあるとしても, ≪忌避≫の問題文脈において両者を関わらせることは可能である。

〈両義性〉(Merleau-Pontyの意味)がいわば〈柔軟な弁証法〉とも言える主体の〈構え〉に対応するのに対し, 〈両価性〉は〈硬化した弁証法〉(森山公夫, 1982, p.45)という主体の〈構え〉に対応する。そして, 後者すなわち〈両価性〉を支える人格特性が〈心理的な硬さ〉(rigidité psychologique)であり, それは中間にある〈曖昧なもの〉〈両義的なもの〉を知覚や判断において排除し, 「白か—黒か」「善か—悪か」「全か—無か」といった絶対的な二分法しか認めない態度として現象する。これを≪忌避≫の問題に引き付けて言えばこうなるだろう。〈両義性〉(Leachの意味)はそれだけでは認知上の問題であり, これを≪忌避≫という形で処理するかどうかは〈両価性〉を支える〈心理的な硬さ〉の度合によるし, その反対の極には≪忌避≫とは親和性をもたない〈両義性〉(Merleau-Pontyの意味)の態度も設定されうるのである。要するに問題は, 認知の次元を包摂する人格構造の心的ダイナミズムの次元をも射程に入れなければならないのである。

精神分析的意味で〈両価性〉(Ambivalenz)とは, 「同一の対象への関係に, 相反する傾向, 態度および感情, とくに愛と憎しみが同時に存在すること」(Laplanche/Pontalis, 1977, p.494)と定義されているが, よりダイナミックに表現すれば, 主体の人格内部で相対立する二つの力——つまり〈禁止〉によって負の結びつきが強いる斥力と, その斥力によって意識面からは駆逐されているが依然として存続している欲動——とが, 統合されずに不安定な均衡を維持している状態であると言えよう。そして, この不安定さを補償するものが先に述べた〈心理的な硬さ〉であり, 〈両義的なもの〉〈曖昧なもの〉⁽⁸⁾に対して過度に不寛容な態度を生み出すのである(心的防衛機制としての≪忌避≫)。

もちろん, こう言ったからといって, 〈タブー〉のような〈共同体の秩序〉

の次元に属する《忌避》を生み出す原因として、＜強迫神経症＞などの心的機制を設定しているなどと理解しないでいただきたい。確かに、《忌避》をめぐる＜精神病理＞現象から＜文化＝社会体系＞の中の《忌避》現象を結論することは誤りであろう。⁽⁹⁾だが、ここで問題なのは、現代社会の産物である精神分析的諸概念を人類学的・民俗学的事象に押しつけることではないし、また両者を「棲み分け」よろしく、分離・共存させることでもない。⁽¹⁰⁾研究対象の位相の違いやそれらを取り巻く条件の隔たりが存在しているにもかかわらず、《忌避》⁽¹¹⁾という点から見ると両者には驚くほどの現象間の類似性が観察できる。だとすれば、試みるべきなのは、両者を通底しうる論理の探究であり、現代社会の《忌避》現象もそれによっていっそう深く解明できるだろう。⁽¹²⁾

5. ＜身体言語＞としての《忌避》

《忌避》を取り囲む諸契機あるいはその諸位相をひと通り考察した段階において、再び問題にしなければならないのは、次のような端緒的な事実である。すなわち、われわれ個々の主体にとって、《忌避》とは取りも直さず鮮明な《忌避》感情として現われるものである。そうした《忌避》感情は、「眉をひそめる」「鳥肌が立つ」「吐き気を催す」「不快だ」「忌まじましい」「ゾッとする」等々の感情表現として言語化されている。すぐ気付くように、これら《忌避》感情に共通する特性は、これらが明確な＜身体的反応＞を伴っているということである。というよりも、正確に言えば、《忌避》とは、反省以前に不可抗的に作動してしまう、強烈だが明瞭には分節化されていないそうした＜情動＞的現象に対して便宜的に与えられた概念に他ならない。

そこでまず、＜情動＞とは何か、という問題に簡単に触れておかねばならないだろう。例えば、外界の危険に対する反応としては、基本的に二種類のものが考えられる。＜逃走＞と＜恐怖＞である。心理学的に言えば、前者が＜定位的適応行動＞⁽¹³⁾であり、後者が＜情動反応＞⁽¹⁴⁾である。そして、一般に両者は非両立の関係にある。よく言われるように、＜逃走＞に夢中になっている最中には＜恐怖＞を感じず、＜逃走＞終了後あるいは＜逃走＞できない時に＜恐怖＞を感じる、ということ想起すればよい。この事態を神経生理学的に捉え直した時、＜定位的適応行動＞と＜情動反応＞とはその＜神経支配＞⁽¹⁵⁾の回路を異にしている、⁽¹⁶⁾とすることができる。単純化して言えば、人間以外の動物にとって、

外界の危険に対するより適合的な反応は〈定位的適応行動〉の方であろうし、事実その側面の方が発達している。(例えば、カモシカが近づくライオンから〈逃走〉せずには〈恐怖〉を感じて立ち止まっていたら、すぐにライオンに食われてしまうだろう。)

それに対して、人間には並外れて〈情動〉が発達している。〈定位的適応行動〉に対して、阻止的にも働く面をもつ〈情動反応〉があまり発達していることは、外界の危険に対処するという点からは適合的でないように見える。当然人間も長い進化の過程で、環境に適応するために機能の取捨選択を行ってきたはずであるから、このように発達した〈情動〉も何らかの適合的な活動なのだろうか。

この点に注目し、人間生活の中で〈情動〉がもつ存在理由を明らかにしたのが、心理学者 H. Wallon の〈情動〉論である。詳細は省かざるをえないが、Wallon の所説のユニークさは、〈情動〉を〈生理〉的次元に閉じ込めないうで、〈生理・心理・社会〉という広がりの中で捉えようとした点にあると言えるだろう。その要点は二つある。まず、ひとつは〈情動〉が〈神経生理〉にその基盤をもちつつも、人間の〈情動〉は生得的で自動的な活動ではなく、独自の回路によって形成される活動であるということである。確かに、あらゆる〈情動〉は「刺激→トヌス(筋肉緊張)→痙攣あるいはその除去」というパターンを基底にもっている。だが、これだけでは固有の意味での〈情動〉とは言えない。そこに〈姿勢の機能〉⁽¹⁷⁾(fonction posturale)と呼ばれる生体内での一種の自己調節機能が加わってはじめて〈情動〉は分節化され、一定の型を備えるようになる。

「情動はさまざまに分化しています。そのそれぞれに応じた姿勢(態度)が情意的要因のうえに刻みつけた形、それが情動だと言えます。」(1983, p.171)
 〈情動〉を形づくる〈姿勢の機能〉は後に〈自己塑形的活動〉⁽¹⁸⁾(activité proprioceptive)を生み出し、いわゆる〈心的なもの〉を形成していくことになる。

だが、Wallon の〈情動〉論でより重要な点は、〈共同性〉を種の固有性として備えている人間にとって、〈情動〉が言語以前のコミュニケーション機能を担っている、という指摘である。それが顕著なのは、言語を習得していないが、他者には絶対的に依存している幼児の生活においてである。Wallon は、

身体的存在としての人間に密接した〈情動〉を、その〈表現性〉と〈伝染性〉を挺子にして〈社会性〉〈共同性〉に結び付けるのである。

「こうして情動が、生物学的存在に根ざしたより基底的なものをとおして、個人を社会にしっかりと結びつけています。場面や事物についてのイメージが知性化されていくにつれて器質的な情動反応がしだいに影をひそめるとしても、個人と社会の結びつきが断たれることはけっしてありません。意識のなかで、器質的印象と知的イメージとは対立しあいながら、同時に連携しあっています。……さまざまの哲学体系が物質と思惟、実存と知性、肉体と精神とのあいだに設けようとしてきた区別をいかにむなしいものであるかを、このことは示しています。」（Wallon, 同書, pp. 136-137）

以上のように〈情動〉を理解した上で、《忌避》感情に伴う〈身体的反応〉の問題に立ち帰ってみよう。その際に、L. Binswanger の〈身体言語〉論が一つの手掛かりとなる。現存在分析派として著名な精神病理学者である Binswanger も〈身体的反応〉を単に〈生理的なもの〉と理解することに反対して、こう述べている。

「むしろ考えるべきは、からだを所有し、からだを体験しているということ一般のもつ完全に統一かつ単一の現象的事実です。」（1967, p.196）

「しかもこのこと [からだであること — 引用者] はたんに、人間がつねになんらかの仕方であらだてで生きている、というだけではなく、人間はいつもなんらかの仕方であらだてで語り、あるいはからだで表現する、ということ、したがって、音声によって分節している言語、および多少とも対象的に分節している心像言語とならんで非常に顕著に分節したからだの言語というものを、ひとは所有している、ということの意味しています。」（同書, pp. 198-199）

人間存在を広い意味で〈語る存在〉として捉えることによって、人間の〈生理的〉〈心理的〉〈共同的〉〈実存的〉位相は、〈全体性〉あるいは〈統一態〉の相の下に置かれることになる。人間は何らかの状況のために〈言語〉による表出の道が塞がれた時でさえ、いや塞がれた時にこそ、Binswanger の言う〈身体言語〉によって、人間存在の、〈他者〉に対しての、〈自己〉に対しての、そして〈世界〉に対しての関係あるいは在り方を語っているのである。そうした文脈の中に置く時、Binswanger の扱った女性の神経症者の〈吐き

気>に捉われて食物を「呑み込めない」という<身体症状>は、彼女が事態を自らの心的装置に「組み込めない」「同化できない」という<ことば>として理解されることになる。

なるほど<吐き気>とは、直接には身体の許容限度を越えたもの、<異物>に対する拒絶反応である。しかし、この<身体的反応>は人格発達の初期に心的関係を生み出す基盤となる⁽¹⁹⁾だけでなく、そうした関係を自ら吸収し、心的装置の一部として作動し続けると考えられる。言い換えれば、人間がその発達過程の中で、<禁止>と<不安>を媒介に<心的なもの>を複雑化させていくにつれ、食物とは限らない様々の<異物>が形成され、それに対しては<吐き気>という原初的な臓器的反応でもって拒絶するということである。⁽²⁰⁾もちろん、その場合<言語>への通路が塞がれているとはいえ、<情動>にも分節化は生じうる。<吐き気>ほどには強烈ではないが、やはり<身体的反応>を伴う拒絶表現である「眉をひそめる」「苦々しく思う」等々が<情動>として分節化⁽²¹⁾されてくる、と考えることは可能であろう。

しかし、ではどうして《忌避》は主として<身体的反応>によって表出されなければならないのだろうか。《忌避》感情を反省してみれば気づくことだが、そこには<恐怖><不安>の要素も、<怒り>の要素も、程度の違いはあるが混り合っている。だが、《忌避》はあからさまの<恐怖>でも、あからさまの<怒り>でもない一種独得の「いやな感じ」「ゾッとする感じ」である。

《忌避》されるものが、<意識的生活>から駆逐され、様々の<遮蔽膜>によって<公共的領域>での現出を禁止されているものであったことをここで再び想起しよう。<意識的生活><公共的領域>にとっては出現してはならないものであっても、出現してしまった《忌避》されるものが明確な刺激となることは動かしがたい。<トーマス>（筋肉緊張）は何らかの形で除去されなければならない⁽²²⁾。だが、《忌避》を《忌避》たらしめている力、すなわち<意識的生活>から駆逐し<公共的領域>での現出を禁止している力は、同時に<情動>をあからさまに<表出>することに対しても抑制力として作用し、《忌避》は<言語的表出>あるいは<言語的分節化>の道から切り離され、取り残された領域となるのである。内側からは<トーマス>という圧力が迫ってくるが、外部からは<表出>に対する圧力を存在し、また<言語的表出>への道も塞がれている。いわば、行き場のない状況なのである。<身体的反応>という

原初的な反応によってしかくトースヌ>は除去できなくなってしまうのだ。⁽²³⁾

「してみれば、情緒の起源は、世界にたいする意識の、自発的な、生きられた退化なのである。意識は、自分が或る仕方では支えきれないものを、べつの仕方、眠りこむようにして、睡眠や夢やヒステリーの意識に自分をちかづけながら、とらえようとこころみるわけだ。」(Sartre, J-P, 1982, p. 318)

*

繰り返して言うが、《忌避》とはいつも反省以前に作動してしまうものであり、アプリオリであるかのごとき力を備えたものである。だが、《忌避》は人間にとって決して生得的なものではない。それゆえ最後に残された問題は、この《忌避》なるものがどのようなプロセス及び心的メカニズムによって主体にビルト・インされるのか、と問題である。

この問題に本格的に取り組んだ先駆者としてS. Freudの名を挙げることに對して、異論を唱える人はおそらくないだろう。Freudの<小児性欲>論によれば、<嫌悪感> (Ekel)は<羞恥心>や<美的及び道徳的理想>とともに、幼児のいわゆる<性愛潜在期>と呼ばれる時期に、性的欲動に対する<心理的な堤防>として形成されるという(1982 (1905), S. 84-86. 邦訳, pp. 42-44)。そして、その時期はだいたい三歳ないし四歳ごろに想定されている。もちろん、ここで言われている<嫌悪感>とは、主として<倒錯的な性生活>と社会から規定されるものに対する<嫌悪感>であろう。いずれにせよここで大事なことは、<心理的な堤防>として挙げられている三つの相互の関係である。<嫌悪感>が<美的及び道徳的理想>と表裏一体の関係にあることはすぐ分かる。つまり、<美的及び道徳的理想>言い換れば<自我理想>が幼児の<自己像>形成にとってポジティブな側面で作用するとすれば、それは<嫌悪感>というネガティブな側面での作用に支えられてはじめて存立していると言えるだろう。そして、この両者は<羞恥心>という言葉に端的に表現されるように、「見る—見られる」という意識の成立、すなわち<自我>の分化と相即的な関係にあることがそこに読み取れる。これらの<心理的な堤防>によって塞ぎ止められた<性欲動>は、その一部が非—性化され、<昇華>というその<文化=社会体系>に適合的な水路づけを受けることになり、<自我>の分化・<自己像>形成とともに、文化への参入を促進することになるわけ

ある。

幼児の文化への参入という点から言えば、このことと同時に〈肛門期〉の課題、すなわち排泄物の〈自己制御〉という課題も重要な関門である。排泄物が〈汚いもの〉の最たるものとされている事実は、おそらくこの〈肛門期〉の課題と無関係ではないだろう。〈肛門期〉の課題を成就した者にとって、排泄物は「生きている限り、『^{おわい}廃物』だとか『汚穢』だとか『吐き気を催すもの』だとか『最低のもの』だとか『悪臭を帯びているもの』だとか、およそ禁じられた不道徳なものの転用語で、軽蔑的な名称で」(A.-Salomé, L., 1976, p. 153) 呼ばれ、そうしたものとして扱われる。だが、幼児にとってそれは所与ではない。Freudの言うように、「ごく初期の幼児にはまだ排泄機能ゆえの恥しさとか、排泄物への嫌悪とかは少しも見られない」(1983, p. 365) のである。それゆえ、Batailleが次のような問いを立てたことも決して荒唐無稽だとは言えない。

「排泄物はその悪臭のために私たちの胸をむかつかせるのだ、と私たちは考える。しかし、排泄物がもともと私たちの嫌悪の対象とはなっていないから、果して悪臭を放っていただろうか。」(1973, pp. 83-84)

幼児にとっても排泄物それ自体は現に存在しているが、その嫌悪感呼び起こすという〈属性〉は、対象に初めから内属しているわけではない。その〈属性〉(〈汚い〉)は、〈肛門期〉の課題である排泄物の〈自己制御〉を達成させるために、親から課せられた〈禁止〉と〈承認〉を幼児が自らの心的装置として組み込んだ結果として形成されると言えるだろう。

そしてまた、この〈肛門期〉は〈醜い〉という《忌避》感情の原型が形成される時期であるとする意見も存在する。精神分析家・北山修によれば、事態は次のようになるという。母子共生の段階においては、母親の献身によって幼児の欲求は十分満たされ、不快なものは極力除去される。しかし、こうした状況は文化への参入の課題の重要な関門のひとつである〈肛門期〉において大きく変化する。つまり、この母子共生関係に〈裂け目〉が導入されるのである。

「今まで他律的に処理されていたみずからの内容物を排泄したとたん、それまでは喜んでいたはずの母親が急に怒りに向けはじめるとき、母親の二面性に直面しながら、幼児は幻滅を体験する。身体内容物の管理の達成は子どもの自立と自律のしるしであり、保持の失敗による汚物の〈露呈〉にたいする

親の〈受容〉のしかたの変化で子供の心は傷つくことになる。……このようにして、『贈り物』をさし出した子供は思わぬ視線に出合って恥をかくことになる。このような羞恥体験には『贈り物』を受けとってくれるはずの受容的な母の態度とそれを拒否する眼前の母の態度の〈くい違い〉に直面して、同定が困難になるときの、受容的な母親についての幻滅の苦痛と怒りを伴うと思われる。」（1982, pp. 86-87）

〈肛門期〉において幼児は、それまでの全的に〈良い母親〉という像に加えて、もう一面の〈悪い母親〉（躰・罰する母親）にも直面せざるをえなくなる。〈醜い=見難い〉とは、「別世界のものとして隠されているものが新たに露呈して〈見たいもの〉と入り混じって両価的葛藤（アンビヴァレンツ・コンフリクト）をひきおこすときの困難と苦痛」（同書, p. 61）に由来し、その状況では「当人には見たいと見たくないがどっちつかずになっている。」（同上）〈対象同定の失敗〉の中で幼児の行き場を失った〈怒り〉と〈不安〉とが、〈醜い〉という《忌避》感情の原型になるという。⁽²⁴⁾

もちろん、以上の所説は未だ仮説の域を出ないものであり、系統的な観察によって検証されなければならない。ともあれ、全体としては「幼児における《忌避》感情の誕生」というテーマに関する研究は非常に乏しい状況であると言わざるをえない。そうした不利な条件の中で少なくとも言えることは、《忌避》はいわば〈生物的存在〉としての幼児が〈文化的存在〉へと移行するその臨界面に位置づけられるということ、そして同時に〈文化の秩序〉の同化と〈主体のアイデンティティ〉の形成とにネガティブな側面から作用しているということである。

6. 結びに代えて

要約しよう。本稿（前稿も含めて）の眼目は、現代社会に生きるわれわれの《忌避》感情を〈生理的嫌悪感〉というアプリオリズムから救い出し、一方で人類学及び民俗学・歴史学の成果と、他方での心理学・精神病理学の成果とをそこに突き合わせることによって、《忌避》現象に内包されている問題性を^{プロブレマティク}発掘し、基本的ないくつかの位相を抽出・整理することであった。〈生理的嫌悪感〉と通常言われるように、すぐれて〈情動〉〈感情〉の次元に属すると見做される《忌避》感情は、実は〈文化=社会体系の秩序〉と〈主体のアイデン

ティティ>に深く連動しており、その存立をネガティブな側面から支えている。そして、《忌避》を《忌避》たらしめている<意識的生活>及び<公共的領域>から排除する力は、<言語的表出>に対しても排除する力として作用し《忌避》表出を<身体的反応>という領域に閉じ込め、取り残すことになる。そのことによって却って《忌避》は、<随意性>の外に置かれることになり、アプリオリであるかのごとき力をもつようになるのである。だが、集団及び個人の《忌避》の強さは、その外観に反して<文化=社会体系の秩序>及び<主体のアイデンティティ>の強靱さを意味しているのではなく（硬直さを意味しているとは言えるだろうが）、むしろその脆弱さを意味していると言えるだろう。

《忌避》。この一種独特の感情に何か重大な意味・問題があるのではないか、という直観に導かれながら考察を加えてきた。《忌避》といういわば「現象界の屑のようなもの」（Freud）も、その僅かな蔓の端を手繰っていくと、予想以上に深くそして多方面に分岐した根が地中からその姿を現してくる。本考察は《忌避》をめぐる問題のほんの端緒に触れたにすぎないが、その問題の深さと広がりがある程度呈示できたとすれば、達成目標の一半には到達したとすべきであろう。

この地点に立って次の課題を展望する時、一方には地理的・歴史的に多様に展開し、変遷する《忌避》の現象群がそれぞれ無限に広がり分析を待っているが、他方、本考察で残された理論的に詰めるべき問題がそれよりも前にある。<文化=社会体系の秩序>及び<主体のアイデンティティ>の形成と《忌避》の形成との関係という途方もなく大きな問題である。だが、手掛かりがないわけではない。おそらく、この問題に最も肉迫していると思われるのは、J. Kristeva の<アブジェクション>論であろう。

「われわれの省察は、深層の心理的-象徴的体制を狙って、人類学の領域と分析を突き抜けていこう。つまり、目標とするのは、人類学上の変異態（社会構造、婚姻規則、宗教儀礼）の基礎となる、またその歴史的現われが何であれ、語る主体特有の体制を示す、一般的な論理的規定である。要するに、精神分析の聞き取りと記号分析的解読がわれわれの同時代人の裡に発見する一つの体制である。」（Kristeva, J., 1980, p. 83. 邦訳, p. 100）

その理論自体が広大な裾野をもち、しかもその理解を容易に許さないKris-

teva の〈アブジェクション〉論への道は、彼女の理論内部に閉じこもることを許さないだろうし、何よりも時間の要する作業であることだけは確かである。

（注）

- (1) 前稿（上）で定義したように、ここで使用される《忌避》概念は、基本的には〈汚い〉〈醜い〉〈無気味〉の三つのカテゴリーを含むものとする。
- (2) 『セム族の宗教』（岩波文庫）参照。
- (3) これに関しては、枚挙にいとまがない。代表的なものだけを挙げれば、S. Freud, 1974 (1912-13), S. 311. 邦訳, pp. 164-165. M. Eliade, 1968, p. 46. É. Durkheim, 1975, p. 313 など。
- (4) 前稿（上）の〈注〉（11）で述べたように、H. S. Sullivan は〈タブー〉を〈禁止〉=〈不安〉=〈関心〉という論理から説明している。Sullivan, H. S., 1970, p. 61. 邦訳, p. 79. 参照。また、G. Bataille の言うように、〈禁止〉は同時に必然的にその〈侵犯〉を誘発するとも言える。「違犯が繁繁に——そして規則的に——行われるということは、ただちに禁止の神聖不可侵の力強さが傷つけられるということではない。心臓の膨脹運動が収縮運動を補足するように、あるいは爆発がそれに先立つ圧縮によって誘発されるように、違犯はつねに禁止の補足物なのである。」（1973, p. 94）
- (5) Freud は彼の〈性欲〉論の中の〈パーヴァージョン〉を論じている箇所において、次のように述べている。「最高のものと最低のものとが性愛においてはいたるところで、互いにこのうえなく親密に依存しあっているのである(…)。」（1982 (1905), S. 71. 邦訳, p. 30）そうした特殊な場合以外にも、例えば、すばらしい音楽を聴いた時にも体験することがあるであろう。
- (6) さらに補足すれば、例えば、唾液（つばき）のもつ呪力は傷の治癒のためにも使われること（石上堅, 1983, p. 839）、糞尿自体が〈聖なるもの〉とされたり（インドにおける牛のそれ）、餌とされたり（中国南部や東南アジア）、化粧料とされたり（インド女性の顔料クムクム、アフリカのある部族、日本でのウグイスの糞）あるいはまた薬としてさえ使われていた（『和漢三才図会』の「人中黄」の項、中国の『三国志』や『神農食経』などの記述、古代エジプト、古代ローマの言い伝えなど）。（以上、碓井益雄, 1982. pp. 167-171）民俗学の中でも、〈赤不浄〉として忌み嫌われてきた女性の経血には、〈不浄〉と同時に〈豊饒〉〈多産〉への畏怖の念が併存していることが指摘されている。（宮田登, 1983. 波平恵美子, 1983. など）
- (7) 訳書では「両極性」とされているが、精神分析の分野でも「両価性」という訳語の方が一般化しつつあり、しかも語源的にも〈両価性〉の方が適しているので、訳文をこの語だけ変更したことを断っておく。
- (8) こうした議論を踏まえた上で、Leach の次のような叙述を読む時、何らかの〈硬直さ〉を感じないわけにはいかない。「無秩序の中に秩序を求めようとする我々の欲求は断片化をもたらすのである。垣根、門、あらゆる種類の柵は道とさす。我々はあらゆるものが範疇ごとにくちんと仕分けされた時にのみ、情緒的

に安心するのである。あれは男の子かね、女の子かね。君はマルクス主義かね、それとも反マルクス主義かね。君は人間かね。それともハツカネズミかね。」(1985, p. 104. 但し傍点は引用者)

- (9) M. Douglasの言うように、〈タブー〉は〈文化の体系〉に起因するものであり、決して「幼児や神経症患者に類する人格をもった原始的な型の個人が創ったもの」(1966, p. 117. 邦訳, p. 222)ではないとするのは正しいだろう。
- (10) ≪忌避≫を精神分析と関係づけて考察する場合には、Kristeva が言う次のような危険が常に存在していることに注意しなければならない。「精神分析の諸概念が練りあげられ機能しているのは現代社会の領野においてであり、したがって、それらは多かれ少なかれ厳密にこの社会における精神構造を範疇分けしている。それらの概念を≪自我≫(主体, 個人)の概念自体がくっきり差異化されていない他の社会に移し換えることは、疑いもなく、研究される当の社会の特殊性を曲げる行為である。」(1983, p. 86)
- (11) Freudが「トテムとタブー」(1912-1913)を書いたのも、〈強迫神経症〉と〈タブー〉に類似性を見たからに他ならない。
- (12) 筆者は未だ十分には理解していないが、J. Kristeva の〈アブジェクション〉論を中心とした彼女の理論活動のことをここで想定している。
- (13) 「外界からの刺激を受容して、その刺激に手を押ししたり、払いのけたり、走り寄ったり、逃げ出したり、とにかく外界の事態を変え、外界との関係を変える活動」(Wallon, 1983, p. 218 の解説)と理解しておいていただければよい。
- (14) 「情動反応のばあいも、それが最初おこるきっかけになるのは、外界の刺激による外受容感覚ですが、そこから生じる反応活動は、外界へ直接働きかけるものではなく、身構えたり、ふるえたり、堅くなったり、痺れんしたり……そういうかたちで自己自身を塑型する活動なのです。」(同書, pp. 218-219 の解説)
- (15) 「フロイトが初期の著作でつけた術語、ある種のエネルギーが身体のそこそこに運ばれ、そこで運動や感覚現象をひきおこすことを意味する。神経支配は生理学的現象であるが、心的エネルギーが神経エネルギーに転換することによって生ずるらしい。」(Laplanche/Pontalis, 1977, p. 239) あえてこの用語を使ったのは、〈定位的適応行動〉と〈情動反応〉が〈神経生理〉的にも別の回路を形づけていることを強調せんがためである。
- (16) Wallon, 同書, pp. 149-156. 及び pp. 217-224. 参照。
- (17) 「姿勢の機能とは調節の機能である。それは状況が命じるような反応をさせるべく生物の体を調節する。そしてまた知覚の領野に登場する対象に対して感覚器官を調節する。この二重の調節のようすは小鳥をねらっている猫や犬がくるのを塀の上から見ている猫などの様子でよくわかる。」(Wallon, 1965, pp. 233-234)
- (18) もちろん〈情動〉の分節化もそれに入るが、さらに〈表象〉活動に連動もしていくものである。
- (19) 精神分析的に言えば、〈呑み込む〉という幼児の行為は後の〈同一化〉の原型となるものである。Freud, S., 1982 (1905), S. 103. 邦訳, p. 59. 参照。
- (20) J. Kristeva は「食物への嫌悪は、棄却作用の形態のうちでも一番基本になる、最も原初的なものだろう」(1980, p. 10. 邦訳, p. 5) と言っている。

- (21) ここでは十分論じられなかったが、〈情動〉に関していえば、Wallon の言うように強い〈伝染性〉があることも《忌避》を考える上では重要な論点となりうるであろう。例えば、〈嘔吐感〉などは〈身体〉から〈身体〉へと直接に伝染してしまうこと、など。
- (22) 〈トーンズ〉を除去してしまうチャンネルは何も《忌避》とは限らない。それ以外には、〈哄笑〉〈物化〉（例えば、〈汚物〉に対する〈医学的眼差し〉）〈反動形式〉（例えば、〈差別〉する代りに「かわいい」と思うこと）〈投影そして過剰な攻撃〉〈儀礼化〉（予防策としての徹底した——）などが考えられよう。
- (23) 〈言語化〉のもつ効果は、精神分析が端的に示しているように、人間のいわゆる〈正常〉な精神生活に予想以上に大きな比重を占めていると考えるべきである。
- (24) この論点と Kristeva が「アブジェクション [忌避作用—引用者] とは一種のナルシズムの危機とも言えよう。」(1980, p. 20. 邦訳, p. 22) と言っている論点は、〈自己像〉といわれるものが〈リビドー〉のナルシズム的備給に支えられているということを考えれば、かなり近いと見做すことができる。

〈引用文献〉

- A. - Salomé, L., 1976, 『ルー・ザロメ著作集—5』, 以文社。
- Bataille, G., 1973, 『著作集—7』, 二見書房。
- Binswanger, L., 1967, 『現象学的人間学』, みすず書房。
- Douglas, M., 1966, *Purity and Danger*, R. K. P.. (邦訳, 『汚穢と禁忌』, 思潮社.)
- Durkheim, É., 1975, 『宗教生活の原初形態 (下)』, 岩波文庫。
- Eliade, M., 1968, 『大地・農耕・女性』, 未来社。
- Freud, S., 1974 (1912-13), "Totem und Tabu", In: *Studienausgabe*, Bd. IX, S. Fischer Verlag. (邦訳, 『著作集—3』, 人文書院.)
- , 1982 (1905), "Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie", In: *Studienausgabe*, Bd. V. (邦訳, 『著作集—5』, 人文書院.)
- 石上堅, 1983, 『日本民俗語大辞典』, 桜楓社。
- 北山修, 1982, 『悲劇の発生論 — 精神分析の理解のために』, 金剛出版。
- Kristeva, J., 1980, *Pouvoirs de l'horreur*, Éditions du Seuil. (邦訳, 『恐怖の権力』, 法政大学出版局.)
- , 1983, 『ことば この未知なるもの』, 国文社。
- Laplanche/Pontalis, 1977, 『精神分析用語辞典』, みすず書房。
- Leach, E., 1985, 『社会人類学案内』, 岩波書店。
- Merleau-Ponty, M., 1966, 「幼児の対人関係」(『眼と精神』, みすず書房. に所収)
- 宮田登, 1983, 『女の霊力と家の神』, 人文書院。
- 森山公夫, 1982, 『心と“やまい”』, 三一新書。
- 波平恵美子, 1983, 『ケガレの構造』, 青土社。

- Sartre, J. - P., 1982, 『哲学論文集』, 人文書院.
- Sullivan, H. S., 1970, *Concepts of Modern Psychiatry*, Norton. (邦訳
『現代精神医学の概念』, みすず書房.)
- 碓井益雄, 1982, 『靈魂の博物誌』, 河出書房新社.
- Wallon, H., 1965, 『児童における性格の起源』, 明治図書.
- , 1983, 『身体・自我・社会』, ミネルヴァ書房.

[筆者の住所：〒183 府中市武蔵台3-15-10 秋津荘202号室]